

広がれ 日韓平和の灯

原爆投下後の広島で採火され、今も燃え続ける原爆の火を、大阪市の市民団体が、在韓被爆者の多い韓国南部・陝川でもとし、そこからさらに日韓各地へ、「平和の火」として届ける活動を展開している。北朝鮮による韓国砲撃で、朝鮮半島を巡る国家間の緊張が高まる中、日韓の賛同者らは「今一度、平和の大切さを改めて考え」と訴えている。

この団体は、「キャンドルナイトワンピース実行委員会」＝大阪府中央区、代表・吉沢武彦さん(32)＝。吉沢さんは2007年、地球環境の保護を目的に、消灯しようそくをともしイベントを企画した際、原爆の火のこを知り、福岡県で火を譲り受けて実施。その後も、原爆の火を使ったキャンドルナイトを関西中心に毎年行ってきた。今秋、在韓被爆者の補償実態などを聞いたことをきっかけに、「被爆は日本だけの問

題ではない。今年は韓国を起点に平和のあかりの輪を広げよう」と考え、日韓で「平和の火」のリレーをすることにした。

今月4日、原爆の火の火種を入れた携帯カイロを持った吉沢さんと日韓の賛同者計20人が陝川に集まり、被爆者100人前後が暮らす「陝川原爆被害者福祉会館」を訪問。被爆の経験を聞いた後、館内の石塔にカイロの火を入れ、「平和の火」とした。吉沢さんらは、当時広島で

大阪の団体 ▶ 在韓被爆者



亡くなった韓国人をしのんで、韓国の童謡「コヒャンエボム(故郷の春)」を韓国語で歌い、「この火には、韓国に戻りたかった犠牲者の命が宿っている。両国で平和のた

原爆の火 原爆投下後の広島市内で山本達雄氏(2004年死去)が、被爆死した書店経営の叔父の形見として、叔父宅の焼け跡でくすぶっていた火を携帯カイロに入れ、故郷の福岡県星野村(現八女市)に持ち帰った。山本家の火鉢などで消さずに維持されてきたが、1996年に村が管理を引き継いだ。現在は「平和の塔」で燃え続けている。



めに忘れず祈り続けたい」と思いを伝えた。在韓被爆者約40人は、吉沢さんらの考えに同意。一緒に約130本のろうそくを並べて火をつけ、光り輝く「PEACE(平和)」の文字をつくった。在韓被爆者らは、「隣国同士、助け合って困難を乗り越

「原爆の火」受け継ぎ各地へ

①原爆の火をともしたらろうそくで「PEACE」の文字をつくり、平和を祈る在韓被爆者ら②原爆の火がともされた石塔(韓国・陝川原爆被害者福祉会館で)＝いずれも吉沢さん提供＝

えていけたらと思う」「平和のために日本にもっと積極的に取り組んでほしい」などと言葉を寄せた。この後、陝川で点灯した火は、日韓の20人の携帯カイロなどに移され、4日以降、それぞれが韓国や日本の地元など12か所でキャンドルナイトのイベントを開催。陝川で聞いた被爆者の体験を語り、「命のぬくもりを感じて」と参加者と火を分け合っている。

火は、さらに60か所以上に移され、冬至の22日前後にもされる予定。大阪では12日と18日に大阪府中央区内でイベントを行い点灯する。吉沢さんは、原爆の火を知ってから広島府平和記念資料館に何度も通って勉強するなど関心を深め、平和の尊さを実感したという。「今も残る原爆の火を分け合うことで、平和の重みをかみしめ、被爆者の思いを日韓、さらに世界へと伝えていきたい」と話している。問い合わせは、同委員会(06・6375・7816)へ。